

『銀30枚』

成井 透

蛇の目のように鋭く光る目をしたデーモンは、主なるヤハウエに向かって不満にみちた、ガラガラ声で自分の考えを主張して言った。

「あの男が天国に入ることとを赦すことは狂気の沙汰でございませぬ。地獄に堕ちないで天国へ行くとなれば誰一人として地獄に来る者は無くなりませぬ」

「あの男とは誰のことを指しているのか」

「イクティス（註）ICHTHYS）を裏切った男のことでございます。ユダヤ人の指導者たちに『銀30枚』で裏切ったのです。イクティスは、その結果、叛逆罪に対する罰として十字架刑に処せられたのでございます」

「あの男はイクティスの弟子の一人ではなかったのか。最も忠実な弟子が裏切るようなことをしたのか、理解に苦しむ」

「わかりませぬ。人間は風に揺らぐ葦のように絶えず変わるものですから」

「しかも、たったの『銀30枚』で主人を敵の手に渡すとは、理解に苦しむ」

「そこなんですがね。あの男はぶどう園を所有する金持ちで、主人が『銀30枚』の値打もない、と思っただけではないでしょうか」

デーモンは久し振りの対話の中にヤハウエのやさしさを感じていた。

「あの男はイクティスを誤解していたのです。ローマ帝国から独立し、自分たちの政府を樹立してユダヤ教による政治に期待をかけていたのです」

「イクティスは『自分を愛するように隣人を愛せよ』と、出発点を自己否定に置いたのに誰もその深い意味を理解できなかつた」

「ですから人間は一人も救われたことはないのにヤハウエ様は、例外をお創りになられました」と、デーモンは自分が支配している地獄の秩序を変更したことに異議を唱えて自分の不満を述べた。

『地獄に堕ちるべき罪深き者こそ救われるというパラドックスをデーモンには理解できないように見えた。宇宙は二元論という対立から成り立ち、すべてが相対的であつて、絶対的なものは何一つ存在しないのに人間は、絶対的なものが存在する』と錯覚しているようだ。

「わたくしには理解できません。人間が悪を働く。罪を犯す。そうしたら地獄に堕ちる。非常にシンプルな世界です。」

イクテイスを裏切つて、弟子であつた男が十字架という極刑になるように手を貸した。これは人間として赦されることではありません」

デーモンはヤハウエに対してあの男が地獄の火で焼かれ、苦しむことが当然な罰だと、信じて疑うことはなかった。それが正義というものだ、と思つた。

ヤハウエは沈黙したまま答えなかつた。まるで立場が逆転して、自分がデーモンになつた錯覚におそわれたからだ。

一方、デーモンは納得できなかつた。裏切りという罪を犯した男が地獄に行く代わりに、何故、天国に行くのか、デーモンには『地獄に墮ちるものこそ救われる』という論理を納得できないでいた。そんな絶対矛盾を受容できるものではなかつた。

人間はそれをバラドックスと呼んでいることをデーモンも知つていたが、正確な意味については関心がなかつた。

イクテイスは、「貧しい人は幸いである」と説いたが、誰もそれがどういう意味か理解できないでいた。

「デーモンよ、人間の中には自分を愛するように隣り人を愛することのできる人など一人もない」

「ですからおかしい、と言っているんです。人が救われるのは行いによらない、などと、あなた様を信じる者だけが救われ、それが解かる人間になるためには悪を犯さなければ駄目だなんて。矛盾ですよ。」

日本でも石川五右衛門という人は釜茹にされるほどの悪人だつたそうですが、五右衛門も極楽へ行ったようです。これじゃ、誰が天国に行き、誰が地獄に墮ちるか、さっぱりわからねえ」と、デーモンは頭を強くたたいた。

「あの男はデーモンが考えるほど悪い人間ではない。彼の存在なしにイクテイスの十字架の上で血を流した意味を語ることはできない。」

暗闇なしに光の存在を知ることにはできないように、あの男の裏切りは必要不可欠なことであつたのだ。彼は自分の罪を悔いて自殺して赦罪されたのだ。人間たちは、あの男の罪を悪く考え過ぎる。姦淫した女に誰も石を投げつけることができないように、あの男も赦されていいのだ」と、ヤハウエはデーモンに言ったが、デーモンは納得しないで沈黙していた。

(註) イクテイスはギリシャ語で魚を意味する。

ICHTHYS は、イエス・キリスト、神の子にして救い主の頭文字だけをとると魚、イクテイスになる。